

礼 文 島 紀 行

米 川 利 美

利尻島が左手後方に廻ると船は香深港に入る。構内を出た途端に雪に見舞われた我々だったが、宿に入る頃にはまた利尻島の向う側までも晴れ渡っていた。

香深 は役場、郵便局、小中学校、病院、信用金庫などがあつて島の行政の中心地らしい寒風気が感じられる。

礼文島は南北に細長い、平坦な島である。隣りの利尻島がほぼ円形の山ばかりの島であるのとよい対称をなしている。両者のコンビ振りはちょうど南の種子島屋久島と似ている。なだらかな丘陵地帯の此の島は海岸近くに段丘がよく発達している。南部は幅狭く、北に行くに従つて広がり、北端でスコトン岬と金田岬に分かれている。南端の知床から北端まで東海岸を一直線に船泊まで典型的な街村を形成している。日本海に面する西海岸は断崖絶壁で南北両端の一部を除いてはとても人間の住める所では無いようだ。——「日本人のイメージから遠くかけ離れた風景——荒涼、寂寥、そしてむき出しの親しさ——これが日本の北の果ての構内の印象である。」——この構内から北の海を4.5時間で礼文島に着く。

礼文島はアイヌ語でレブンシリと云う。レブンは「海」又は「沖」シリは「島」の意味である。即ち「沖の島」がその意味であり、利尻島より向うにある島なのである。アイヌ語の土地に対する名附方は必ず平壺にその土地を表現しているそうだが、北海道の日本海方面寄には奥尻島、元虎島、瀧尻島、利尻島、礼文島があり「尻」(シリ)が多く残っているのをみても「シリ」が島であるという事がはつきりと解る。

× × × ×

役場で今後の打合せを行い、アイヌの戦跡、[○]樺岩[○]の見学に出かける事にする。町のラーメン屋に立ち寄つた。その値段の高いのに驚いた。一杯のラーメンにも北の果ての感概が身にしみた。丁度一年前、屋久島で船の欠航でギヤベツばかりのチヤンポンを食べさせられたのを思い出した。

市街地を出ると膝を没する豊かな残雪の山道を一時間ほど登ると峠に出た。[○]樺岩[○]とおぼしき高処がある。戦前、樺太は山火事が多いので名物になっていた

らしいが、此の島も山火事で木の少ないのが目立つ。利尻道立公園の中心地と地元では言っているが、お隣の利尻島と観光客の引つ張り合いらしい。昨年はス万人の観光客が島に押しかけたそう。その中の半数が内地からの人々だと云うから驚く。観光客は時々寄せたいが、それに施える宿泊施設の不足が町の人々の頭痛のタネである。此の辺り一帯は今雪にうずもれているが、6月ともなれば三百余種の高山植物が乱れ咲く処だ。レブン草、レブンサイゴウ、レブシコザクラ、チシマリンドウ、数え上げれば限りがない。内地では3千米級の山でしか見られない高山植物の宝庫でもある。「高山植物を取らないで下さい。礼文村」の立板が寂しく立っていた。

〇さにはてのお花畑に我立ちて

瘦見る心地にしばしなりぬる。

(高松宮妃殿下)

人を恐れぬカラスの群が我々の行く先々で喧ましく鳴き立てて、脆交っている。正月に高松時代の友達に久し振りで会った。その友は自称し、鳥類研究者である。その時彼は、北海道に行くのならばカラスを見て来てくれ、と言った。別に自分は北海道まで高い汽車賃を使ってわざわざカラスを見に出かけるわけでもないしと思つたが、その時は一応承知して置いた。彼が言つたのは内地のカラスと違つた種類がハシブトガラスを見よ、というわけである。つまり嘴の太い大きいカラスだ。正しくその通り彼が分厚い本で写真まで見せてくれたカラスが、ギヤー、ギヤー喧しく鳴きながら飛び交う様は周囲の荒涼たる景色とマッチして、一種異様な雰囲気をかもし出している。それにしても、こんなに沢山のカラスは何処から集つたのだろうか。北の風に吹かれて寒くなりヤツケを着込んでいたが、やり切れなくなり、山を降り出したら又もや雪になつた。今日は全く何回も天気の変る日だ。宿に着く頃には又もや晴れ上つていた。その夜、ストーブの火を何度も消してしまつては宿の娘さんに火をつけに来てもらつた。が、また消してしまつて、遂に我々もあきらめて早々に歸込んでしまつた。

翌日は良い天気だつた。バスの通らない雪道を船舶まで歩きだした。今日の利尻富士は最高だ。香深井あたりで右手にノシヤツツ岬が見えだした。やけに白く輝き、それは氷山の様に、色んな水平線上に浮かんでいた。橋内市内も未だ雪は多かつたのだ。昭和33年、日蝕観測によつて島は世に知られたようだが、科学の島である事を島の人達は忘れられないらしい。当時の新聞は「わずかに一秒間の金環日食をとらえるのにノ6ノ名のぼる科学隊がノヶ月にわたりキトウス及

は網内で頑張る為、延々スズノ目かの配給米と二石一斗の加配米、野菜物ノズク3貫余……ニシンで明け暮れていた。国境の島、礼文島にとって「観光礼文」を売り出すに絶好のチャンスとはかり地元では全国的に協力をおしなかつたのである。」と報じている。朝、出がけに船のおばさんに注意されていたので、気をつけてはいたのだが遂にキトウスをすぎても「記念碑」は見つからなかつた。残雪豊かな久種湖畔を通り抜けると船舶についた。すでに夜のとばりまでもういくばくもない頃だった。キスリング、ザツクの重さに加えて雪の道でなかなかながゆるくなかつた。ここでは我々は福井という漁師の方にお世話になる事になつてゐる高校合格者発表のある、役場支所前の掲示板を見ていたら、後から声をかけられた。その人が福井氏だった。

× × × ×

其夜から、或る時は小学校で、或時は個人の家で婦人会の人達と、青年団の人々と、或は一般の人々と座談会を幾度となく開いた。

翌日も兎争な海岸段立をなしているスコトン岬まで半日がかりで歩いた。日本の風景にしか持した事のない我々にはこの木が一本も見られない草ばかりのノツペリとした景観に大陸的景観を思い起させて島に居る事を忘れさせる。北海道的景観のミニユネシア版だ。晴れた日には前方に樺太の山脈が望まれるはずだが相憎の曇空に、ミゾレ模様の悪天候で、ネズミ色したやけに暗い海しか見えない。明日はシケルかも知れない。岬の先きにポツンと周囲四キロ米程のトド島が浮かんでいる。

ボラはク〜8センチ位の時はツメシとかスバシリといい、ス〇センチ位になればイナ、30センチ位でボラと呼び、70センチ位にまで大きくなるがこれをトドと呼ぶ。トドのつまりこれで終まいだというわけだが、しかし、このトド島はその方ではない。海のギャンで、海獣トド（海鳥）の方だ。今年も道南地方では、ことに江差近海でトドによる漁の被害がひどいので自衛隊に依頼してトド退治をしてもらっている新聞記事を函館で読んだ。トドは成人いや成獣すると6尺〜1丈2尺、6、70貫にもなる大物である。そのゴツツイ奴が網にかつた魚を喰ひ荒らすのだから人間側としては黙っているわけには行かない。獲物は全部喰われ、獣産と頼む網をズタ・ズタに引きさかれてしまうのでは。かくてトド君達は自衛隊員の実弾訓練の良き相手ではある。ちよつと横道にそれたが、どちらにしてもトドのつまり日本は此処で終まいという事にある。

此の島の近辺は潮になつていてコンブの宝庫である。夏期には島に移住して大

いに救ぎまくる爲の家もある。その奥に閑しては能登の細倉島に見られる一家割つての出救ぎの島だ。

スコトン小学校は校長先生と先生二人の小さな学校だった。春休み中にも拘らず子供達は学校であそんでいた。これは避地共通の現象でもある。家に居ても小さい子供達が手伝う仕事は漁期のみだ。従つて遊び道具のない家に居る筈がない。学校のピンポン台が常時満員なものも当然と言える。若い先生から子供達が社会常識が着しく欠如している爲にも、教えるにも二倍の苦勞がいると聞かされた。牛が黒くて力の強い良い家畜だという事しては解つていても実際にどれ位の大きさのものが？それから説明しなければならぬ。彼等は一寸羞かしがり屋だが、すぐに我々と仲良しになつた。

激しい波風に目覺めた。小さい二重窓から見る海はさのうまでの海とは似ても似つかぬ様子を呈していた。次から次へと巨大な白波がまるで生き物の如く陸に襲いかかつてくる。海全体が何段もの階段状の大波になつて次々とこちらに押し寄せてくる。果てし無い彼方から何日間もかかつて今やつと陸近くにたどり着き怒り狂つた様に次から次こちらに向つてせまつて来る。今日の北の海は気嫌が悪いらしい。この日は一日中海はシケていた。

エンドヤ。寛政4年（1792年）ロシア使節ラフスマン、漂流民幸太夫を伴ひ・根室に來り通商要求。幕府はこれを拒絶す。（1779年）始めて我國にロシア人が乗船し、同年蝦夷地に來り松前氏、その通商要求を拒否す。すなわち徳川幕府300年の末期、幕政批判と尊王論が現われ田沼時代より寛政の改革へ、そしてロシア船の来航が日々に激しくなり、北方の海防問題が重要になり始めた頃の話、加賀国の錢屋五兵衛がロシアとの密貿易を行い、そのかたわら「きんつばじ虎」を始めた。それが江戸仕込みであつたので屋号を江戸屋としたことからこの地がエンドヤと呼ばれるようになったと伝えられる所。風雲児、錢屋五兵衛の生涯を偶び青年会の手で記念塔が建てられている。

× × × ×

島の人々の生活は漁業で支えられている。近年、南部の知床で新しく赴任して來た小学校の先生が温床で稲を栽培して子供達は言うに及ばず父兄達に大いに喜ばれたという所である。

一般に年間30万円と見られる所得の大半を夏期に求めるコンブ取りの仕事は、大切な。此處では南部の香派の様に手当り仕務にコンブを採取してはいない。養殖業協同組合との話し合いによつて一年生のコンブの採取を禁じている。

コンブには夏コンブ、利尻コンブ、三石コンブ、長コンブ、ホンソメコンブ等があり、寒流性藻ではあるが幾分暖流の影響のある方が美味らしい。根室地方のコンブは有名だが、この利尻コンブ（或では礼文コンブと言う。島の人達は利尻コンブの名前に大いに不満だ。）は対島暖流の北上する区域の石狩、大塩方面にも産するが利尻、礼文島が中心である。此のコンブは最も美味なダシ汁が出来る事で、しかも全然濁らないのが特長である。戦前から京阪神方面に収穫量の殆んどを移出しているそうだ。大坂名物のてつちりのダシコンブは礼文島産だ。

1月	タラ、スケソウ、タコ。	7月	コウナゴ、フノリ、ワカメ
2月	タラ、スケソウ、タコ。		ウニ。
3月	タラ、スケソウ、タコ。	8月	ウニ、ムラサキウニ、(ノカ)
4月	ホツケ、タラ、スケソウ。		コンブ、ワカメ。
5月	ホツケ、コウナゴ。	9月	ホツケ、イカ。
6月	コウナゴ、フノリ、ワカメ、	10月	ホツケ、イカ、アワビ。
	ウニ、ガンゼ。	11月	タコ、12月 タコ。

これは島全体の漁獲の種類を見た場合だが、北部ではホツケ漁業にその特色がみられ、これに対して西海岸のアワビコタン、ウエンドマリ、ウエンナイ、元地の諸部落ではタラ漁業に特色付けられる。日本海を漁場として延縄一本で生活している。直接海に落ち込む急斜面に階段式に家々が並び、荒海に防波堤が突き出ている景色は全く勇ましく素晴らしい。文久年間に島に渡って開拓者達は恐らくアイヌ人以上の勇氣でもって日本海を漕ぎ出て行つたのだろう。

前に述べた如く春と秋はホツケ、夏はコンブ、秋はイカ、冬はタラと四季を通じて漁獲はあるが、何んと言つても寂しいのは、かつてはニシンに明け、ニシンに暮れたと云われる島だ。毎年3、4月にはその海面を銀色に染めた程、群がって来たニシンが昭和29年を最後に全然近寄りなくなつた事である。元地部落で親方衆を訪れた。40年輩のガツトリとした休格で潮に吹かれた頬は海の男の精悍さがあつた。

カモメはニシンについて来る鳥だがコンヤだ、コンヤだと鳴くと云う。今夜は大漁だと鳴くんだそうだ。昔はニシン漁が終ると稚内の町までよくあそびに行つたものだという老人はニシンが射出する精卵で紺碧の海がたちまち乳白色に変わり、折からの夕陽に輝くその西の海の色が忘れられないと話してくれた。親方も「ウシ」「ウニ」とうなずくのだった。彼の話しは京都の話しから里塚の美しさになり、大坂のバーの女の話しになつて我々を驚かせた。羽乗りのさいた昔の親方

の姿が偶ばれよう。ニシンの乾燥場だった倉庫もつぎつぎとつぶれ、その土台石ばかりが寂しく当時の面影を伝えてくれる。セメント造りの大きなイケスも中には名も知らない海藻だけがゆれていた。親切な親方の歌で昼食を食べ外へ出た。

ニシンに見放された礼文島だが、しかしニシンに対する人々の郷愁は仲々に根強く容易にあきらめられない。ようやく最近になって年寄連中もあきらめがついたようだ。現在はスケソウ、ホツケ、イカ、コンブ等の水あげで生活が支えられている。それから礼文島で忘れられない臭にガヤとカスベがある。どちらも島の言葉でガヤはメバルの一種でメバルより小型のものが多く黒褐色で背に鋭いトゲが並列している外観は仲々に勇ましく立派だがこいつはだまし釣とつけて餌をつげずにフグの皮だの魚の羽根をつけた針にピヨイ、ピヨイと簡単に引っかかり、ガヤガヤと集つて来るのでガヤと呼ばれるそう。カスベと云うのはエイの事であつて菱形で平べったヤツだ。今丁度漁期で壘半分位の大きいヤツが家々の前に肥料にするスケソウの頭に混つてずらりと乾してあるのは壮観である。

× × × ×

スコトン、倉田の二つの岬をつなぐ沿岸は島では珍らしい砂浜海岸で中心部には砂丘が連なり、その奥に抱かれたのが砂丘でせき止められた周囲4Kほどの久種湖である。未だ残雪豊かで完全に結氷している湖面を見ると次の様な伝説も神秘的で北国らしい清潔さが感じられる。プウネトマリ（船舶）の大沢にヌプリとイコツホの仲の良い二人の青年がいた。部落の酋長オテナの美しい娘はエリアといった。二人は同時に美しいエリアが好きになり、だんだん仲が悪くなった。とうとう二人は闘つて勝負をきめる事にし、エリアも勝つたものにゆるす事にした。大沢の草原で大マサカリでヌプリがイコツホを殺した。イコツホは苦しい呼吸の中から喘ぎ喘ぎ叫んだ。「エリアを愛して呉れ、エリアを……。」ヌプリはこの言葉に胸をかき乱された。俺は勝つたのか？、友を殺してまでも、彼は涙をはらはらと落すのであつた。エリアは悲しみのあまり自らノドを突いて死んだ。ヌプリはこの様に気が狂ひ折重つて死んだ。この三人の屍のあとに水溜が出来てアヤメの花が咲き、だんだん大きな沼になり久種湖が出来たのだと云う。

この湖畔にはチヤシ（砦）が残っている。チヤシはアイヌの砦のようなもので此所で敵を防ぎ会議を開くなど種々の事が行なわれた。穴式のものもあれば壘式のものもあり様式は色々であつたらしいが、とにかくアイヌの酋長の居城ともいふべきものでアイヌはこれを住む土地の最も勝れた条件の土地に選んで建設した。

礼文島の先住民族はもちろんアイヌ人である。ウエンドマリあたりに強力なる

アイヌの酋長が船泊に住み、香深の桃岩のアイヌと争かつたという伝説があり、又桃岩のアイヌは北海道本土の増毛アイヌと戦争し絶滅したと伝えられる。船泊に和人が住むようになったのは天明年間である。文化5年(1808年)に間宮林蔵は樺太探検で間宮海峡を発見している。この10年余り後、即ち文政4年(1821年)蝦夷地を松前氏に還附し松前奉行を發するまでは幕府直轄地であつた。しかし和人が本格的に移住し始めたのは明治になつてからの事である。

何故アイヌが短期間に減少したか、それは文化2年(1805年)の天然痘流行、奥羽に始つた天明年間の大飢饉は全国に及び天明の打ちこわしまで発生した。その大飢饉はこゝは北方の離島のアイヌの生命までおびやかしたのであつた。それに不漁も重なりアイヌは急救に減少したのである。島の人達はアイヌに対して内地の人々の無理解からアイヌ人と間違れる事を恐れている人も居る。北海道人には全国から集まつた開拓者達が手に手を取り合つて生活の築き上げた土地柄がある。だから内地の事に関西人の様な他者根性は持つていない。北方の気候がそうさせるのである。樺太からの引き上げ者も多い。厳寒の樺太に生活してきた人々にはその荒々しい自然に対する激しい氣迫が感じられる。

奥の匂いのプンパンする衣類に包んだ頑健な海の男達と慈見を戦わした。寒々とした小学校の講堂で礼文島の不便さを読み、代議士も補内までは来るが(それも選挙前に)この礼文島まではあまり姿を見せぬ、来島しても夏の気候の良い時に避暑気かた。一度でよいから冬のいばりのきつい頃に、ヒュラスも寒さの脅に凍つてゐる。その時に、三度の飯の中一度抜きか、ジャガイモを食つてゐる漁民の生活を見に来いと我々は教しく責めたてられ閉口した。たまたま今年の冬には此島でも郵便局のストライキがあつたらしく「経省学部の学生さん、あれは何故だ?」と問われアハ笑つた。「法律的にはどうなるんだて」に三井氏も果敢に答えねばならなかつた。島で獲れるコンブの話から遂には大阪の物価の話になり、自分は下宿してゐるのだと言えば、その費用からやりくり談まで話さねばならない破目に落ち入り弱つたなと思つてゐるとまた別の方角から「インフレーションはどうして起るのか?」とこれまた先程から何べんも質問してゐる一番のウルサ型氏。どうやらその夜はこちらが質問するどころの騒ぎではなかつた。各大臣になり代りまして次々と難問に取りくんだのだつた。テープレコーダーを廻しておけば良かったなと思つたがすでに後の衆。北海道全域で言える事だが彼等の言葉には東北だとか西日本の田舎のような方言は少ない。標準語に近い美しい言葉だ。大阪から持つてきた大阪、京都の名所案内カラスライドは非常に喜ばれた。説明役の聖兼君をして嬉しがらせたが、二度目の時にサツパリ反応が無く彼

を大いにくさらせたりした。

一週間に亘り南都の香派に帰つて来た。青年団との幹部と会合を持った。宿の厚意のアルコールの御蔭で団長氏一人べらべら話しがはずむが、女性側は一向に口が重い。放送局から貸りてきたデンスケを今日までかつぎ廻つたは放送局への義務を果さねばならない。団長氏に頼いて会計氏も酔がまわるほどに愉快になりソーラン節も狂び出したが、ミス礼文島の面々は相変らずマイクを向けるとサツパリ。「それではバスガイドさん一つ頼みます。」団長氏の機やりに益々話しくくなり、親見知りの宿の娘さんに女性を代表して発表してもらつて放送局への義務を果たした。「花ちゃん、三平汁食べさせてあげたか？」団長氏。三平汁はニンシを材料としたもので、昔北海道に定住者が少なかつた頃、一瓶あげたら放郷に錦を飾つて帰らうと考えて北海道に渡つた人々もこの三平汁の味を覚えたら北海道からかへれなくなつてしまうと云われたものらしい。娘さんに今夜のオカズがそうだと教えてもらつた。「うんこの旅館は良い旅館だ。」ニンシに見放された礼文島だが今夜の三平汁はニンシでなくタラだつたと思うが残念ながら娘さんに聞くのを忘れてしまった。昨夜の愉快な後氏等に彼女らの見送りを受けて港を離れたのは昼前だつた。一人の転校生が乗り合せ、彼の母と彼は全校生徒と先生のカーブを握つたまま頭を垂れていたが、とうとう母はこうえ切れなくなつたのかいいうつと落ちる涙にむせんでいた。我々はそこにいたたまれない様な気持ちになり反対側に廻つた。船はすぐに港外へ出た。我々の爲に仕事が終わつてから、夜遅くまで連日に渡つて行動を共にして下さり、多くの助言をして下さつた福井正二氏には全く御世話になつた。寒魚のトドの肉まで食べさせて下さつた駄もあつた。何處の家でも暖かい態度で我々を泊めて下さつた。時には我々の面映う難かしい煩悶をされ冷汗をかいた事もあつたが、とも角島の人々の親切により我々は人々と起居を共にする事が出来た。一般に人々は情に厚く（孤独と寂寞からか）自田の感情と離島特有の不平和性からあきらめに変り、軽じて愛犯心が強い。北の海に生活する漁村に直接に接することができた。あんなに憂目だつた島もわずかの間にすっかり化粧交えをして土の色が目にしみる。

島の人々が待ちこがれていた春はもうすぐ近くまで来ているようだ。妙に感傷的になつた私は後甲板に廻り三人で声を上げて歌いだした。船のローリングに身を任せながら。

ノシヤブ岬が見え出す頃、末練がましくもう一度礼文島の方を見た。もうそこには荒涼た北の海だけだつた。